

ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における エピクロスの影響について

宮 川 知 子

The Influence of Epicurus on Brillat-Savarin's *The Physiology of Taste*

Tomoko MIYAGAWA

Abstract

Jean Anthelme Brillat-Savarin's *The Physiology of Taste* (*Physiologie du goût*, 1825) contains a subtly provocative quotation from Jean-Louis Alibert's *The Physiology of the Passions* (*Physiologie des Passions*, 1825). While Alibert condemned gluttony and praised the Pythagorean ideal of moderation—criticizing Epicurus for his advocacy of pleasure—Brillat-Savarin appropriated a portion of Alibert's dialogue and employed it in a completely opposite sense, using it to legitimize the enjoyment of food. This study explores the reasons behind Brillat-Savarin's subversive reinterpretation and examines the influence of Epicurean philosophy in *The Physiology of Taste*.

A close reading of the text reveals several affinities between Brillat-Savarin's reflections on sleep, dreams, and death and those of Epicurus. During the Enlightenment and early nineteenth century, Lucretius's *De Rerum Natura*—the poetic expression of Epicurean materialism—was widely read in France and frequently translated. Given Brillat-Savarin's broad literary culture, it is highly plausible that he was familiar with these works. His citation of Alibert should therefore be understood not only as a critique of religiously grounded temperance, but also as a subtle affirmation of Epicurean values.

Rejecting superstition and approaching the study of human life from a scientific perspective, Brillat-Savarin refrains from any overt criticism of religion in his discussion of death, yet lightly dispels the fear of death instilled by religious teachings. Beneath the light and playful tone of *The Physiology of Taste*, interwoven with numerous anecdotes about food, a hidden materialist thinker clearly emerges—one whose philosophical outlook resonates closely with that of Lucretius.

はじめに

18世紀半ばに生まれたブリヤ＝サヴァランは、法曹の仕事の傍ら、晩年に書き溜めていた食に関する考察を一冊の書籍にまとめ、1825年に出版した。サヴァランは、その著書『味覚の生理学』⁽¹⁾ (1825)において、アリベールの『情念の生理学』(1825)から、アリベールの意図とは真逆の意味を持たせた引用を行なっている。『情念の生理学』の中でアリベールは食の不節制を批判した。エピクロスとピタゴラスを対話させ、ピタゴラスの節制の思想を賛美し、エピクロスを道徳的に批判したのである。ところがサヴァランは、エピクロスの言

(1) BRILLAT-SAVARIN, *Physiologie du goût*, présentation de Jean-François Revel, Champs classiques, Flammarion, 1982. 以下、P. G. と略記する。日本語訳は、関根秀雄、戸部松美による既訳(『美味礼讃』, 岩波書店, 1967年)に拠り、必要と思われる箇所にかんして、また文脈に応じて適宜、訳を改めた。また、玉村豊男訳, (『美味礼讃』上下巻, 中央公論社, 2021年)についても確認をした。なお表題については、*Physiologie du goût* をそのまま訳し、『味覚の生理学』とした。

およびアリベールの不節制批判の言葉をそっくりそのまま引用し、アリベールの意図とは真逆の意味で、食の快楽を正当化する文脈で使用した⁽²⁾。それはなぜか。本稿においては、それを明らかにするとともに、ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』におけるエピクロスの影響について論じたい。

『味覚の生理学』を注意深く読めば、サヴァランの眠り、夢、死などについての考え方がエピクロスのそれと重なることがわかる。18世紀から19世紀にかけては、エピクロス主義を詩的に表現したルクレティウスの著書⁽³⁾が啓蒙主義に大きな影響を与え、数多くのフランス語訳も出版された。幾多の文学作品に親しんでいたサヴァランは、ラテン語でにせよ、フランス語でにせよ、その思想に触れていた可能性が高い。

それだけではなく、エピクロスの唯物論的視点は、『味覚の生理学』全体を貫く思想にも繋がっているように思われる。18世紀、19世紀のフランスにおけるルクレティウスの受容も踏まえそれらを比較検討し、サヴァランがアリベールの『情念の生理学』から批判的引用を行った真意を明らかにするとともに、『味覚の生理学』の、その一見穏やかで心地よい文章の中に隠されたサヴァランの思想を審らかにしたい⁽⁴⁾。

I. アリベール『情念の生理学』とサヴァラン

サヴァランは『味覚の生理学』本文に、ジャン＝ルイ・アリベールの『情念の生理学』⁽⁵⁾から、その引用箇所を明示しつつ、引用を行なっている。「道徳的感情に関する新たな教理」« *nouvelle doctrine des sentiments moraux* »という副題のついたアリベールの『情念の生理学』は、サヴァランが『味覚の生理学』を刊行する数ヶ月前の1825年に刊行された。アリベールは、カバニスの弟子のイデオログの1人で、1801年に皮膚科の専門病院兼診療所となったサン・ルイ病院の医師であった⁽⁶⁾。アリベールは同書で、「エゴイズム」、「強欲」、「傲慢」、「虚栄」、「勇気」、「恐怖」、「怠惰」といった人間の様々なあり方を章立てし、分析している⁽⁷⁾。そして、「不摂生」という章の中で、道徳的観点から食の快楽を否定しているのである。具体的には、食物やアルコールを過度に摂取することについて、「嘆かわしい不摂生」であり「恥ずべき懶惰」とであると記す。また「みだらで過度な喜び」に身を委ねることは「人間の尊厳にもとる」ことであり、「品格を落とす」行為であると述べている⁽⁸⁾。

では、このアリベールの徹底した道徳感情はどこからきているのか。そこには、アリベールの受けた、医師になるより前の教育が関係しているように思われる。アリベールは、キリスト教教理修道会 « *la congrégation des Pères de la doctrine chrétienne* » で、神父たちのもとカトリック的な環境で極めて古典的な中等教育を受け、当初、聖職者としての将来に備えていた。しかし大革命により修道会が閉鎖されたため、アリベールは新たに設立された師範学校に送られ、1794年に創設された新しい医学学校 « *École de Santé* » の最初の学生の一人と

(2) 加藤三和, 「『味覚の生理学』における生理学の引用」, 『フランス語フランス文学研究』, 121 巻, フランス語フランス文学会, 2022 年, p. 60-63.

(3) *De rerum natura* (『物の本質について』) は, 「エピクロス哲学の敷衍であり, 最良の注釈といえるものである」とされる。(エピクロス, 『自然について 他』, 朴一功, 和田利博訳, 西洋古典叢書, 京都大学出版会, 2025, p. 384.)

(4) 近年では, サヴァランの『味覚の生理学』の思想的側面に注目した研究もみられる。フランソワ・ピカヴェ、ミシェル・オンフレ、パスカル・オリイが、イデオログからの思想的影響を指摘しており、橋本周子は、特にカバニスからの知的影響について触れている。(『美食家の誕生』, 名古屋大学出版会, 2014 年, p. 291-294)。また、浦上祐子は、サヴァランのガストロノミーの成立について、医師カバニスを中心としたイデオログの思想とメヌ・ド・ビランとの思想の影響を明らかにした(『ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における「アントロポノミー」』, 『お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢』, 第 21 巻, 2018 年)。また、ベルトラン・マルケは『味覚の生理学』の哲学的側面に光をあてた。(Bertrand Marquer, « *Physiologie du goût ou “les Symposiaques de la bourgeoisie”* », *Parler en mangeant*, édité par Johann Goeken et al., Presses universitaires de Strasbourg, 2023)。

(5) Jean-Louis ALIBERT, *Physiologie des passions ou nouvelle doctrine des sentiments moraux*, Paris, Béchét Jeune, 1825.

(6) アーウィン・H・アッカークネヒト, 『パリ、病院医学の誕生、革命暦第三年から二月革命へ』, 館野之男訳, みすず書房, 2012, p. 58, p. 64, p. 275-276.

(7) Jean-Louis ALIBERT, *op. cit.*, t. I, II.

(8) Jean-Louis ALIBERT, *op. cit.*, t. I, p. ij.

宮川知子, 「ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』と医学——素人医者としてのサヴァランと家庭医学：節制と食の悦び——」, 早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌 WASEDA RILAS JOURNAL No.12, 2025, p. 73.

なり、医師の道を進むこととなったのである⁽⁹⁾。この医学学校は、パリ、モンペリエ、ストラスブールにあり、郷土の国費の学生が選ばれ、それらの学校に送られることとなっていた。パリの学校の第1期生のひとりがアリベールであり、リシュランの同級生でもあった⁽¹⁰⁾。リシュランは、サヴァランと同郷の医師で、両者は親しい付き合いをしていた。

聖職者になるものとしての教育を受けたアリベールにとって、七つの大罪に数えられる行為である大食を否定するのは、当然のことであるようにも思われる。過剰な食の摂取とそこから引き起こされる食の快楽は、アリベールにとって道徳的に否定されるべきであるのみならず、宗教的観点からも看過できない問題であったのだろう。先に述べた、『情念の生理学』の中で、アリベールが章のタイトルとした「強欲」、「傲慢」、「怠惰」は、いみじくも七つの大罪のうちの3つを数える。これは、単なる偶然とはいえないだろう。さらに、エピクロスは、その同時代人からでさえ、放蕩者、享楽家として糾弾されてきた。この批判は、エピクロスの教義や生活にはそぐわない批判ではあったが、この悪しき評判は長きに渡り否定されることがなかった⁽¹¹⁾。

特に、キリスト教の環境の中では、快楽主義、唯物論といわれたエピクロスの思想は、確実に否定されるべきものであった⁽¹²⁾。「エピクロスは、『宗教の重圧』から人類を解放した人物として、ルクレティウスから称賛されて⁽¹³⁾」いた。エピクロスにとって、「自然は事実であり、神々は、オリュンポスに住して人事にはかわらない」、「宿命の概念はエピクロスとは全く無縁で、自然は単に、人間がそのただ中で平静と平安を見出すべき、根源的、基礎的な存在に過ぎない」のである⁽¹⁴⁾。つまり神によって決められたこと、という概念は、エピクロスとは関係がないということである。このような考えは、古典的な宗教教育を受けたアリベールにとって受け入れ難いものであったことは、想像に難くない。

それではサヴァランは、『味覚の生理学』の中で、アリベールの言葉をどのように転じたのか。アリベールは、『情念の生理学』の「不摂生」の章の中で、18世紀後半から19世紀初頭に隆盛を極めた豪華な料理や美食文化、それらを楽しむ人間をエビキュリアンとして批判した⁽¹⁵⁾。それに対し、サヴァランは、考察「本格的なグルマンディーズの実例」において、アリベールの批判した発展しすぎた料理技術に対する言葉を一言一句そのまま引用した上で⁽¹⁶⁾、ボローズがその料理人に語る言葉として利用し、逆に食の洗練を称揚したのである⁽¹⁷⁾。無論、キリスト教において「グルマンディーズ」とは、「暴食」と訳され、七つの大罪の一つに数えられる罪である。サヴァランは、アリベールのように食の乱用とその節制を道徳と結びつけるのではなく、それらを身体的、つまり生理学的に解決されるべき問題であると認識していた。節制に関しては、アリベール同様、節制をするこ

(9) <https://cths.fr/an/savant.php?id=1354#> (Comité des travaux historiques et scientifiques, Institut rattaché à l'École nationale des chartes)

<https://numerabilis.u-paris.fr/partenaires/sfhd/ecrits/la-vie-et-loeuvre-de-jean-louis-alibert-1768-1837/> (Société Française d'Histoire de la Dermatologie) 最終閲覧日、2025年10月26日。

(10) アーウィン・H・アッカークネヒト、前掲書、2012、p. 58、p. 64、p. 275-276。

(11) 「エピクロス哲学の敵対者たちは、この創始者を、放蕩者、享楽家として悪しきまにけなしたが、しかしこれは、のちにわれわれが見るように、快楽に関する彼の教えとも合致していないし、また、エピクロス自身が公言する態度とも合わない。」(A. A. ロング、『ヘレニズム哲学』、金山弥平訳、京都大学出版会、2003、p. 26)。

ジャン・ブラン『エピクロス哲学』、有田潤訳、白水社ク・セ・ジュ、1960、p. 25。にもこのような記述が見られる。

(12) *Démonstration de l'existence de Dieu, tirée de l'art de la nature* (1713) のなかで、フェヌロンはエピクロスとその哲学を批判的に取り上げている。

(13) A. A. ロング、『ヘレニズム哲学』、金山弥平訳、京都大学出版会、2003、p. 60。

(14) ジャン・ブラン『エピクロス哲学』、有田潤訳、白水社ク・セ・ジュ、1960、p. 16。

(15) Jean-Louis ALIBERT, *op. cit.*, t. I, p. 193-195。

(16) 「彼〔ボローズ〕はまた、学問と機知を兼ね備えた一博士とともに次のように言った。料理人は火の作用によって食物を改良する術を極めなければならなかったが、それは古人の知らない技術であった。この技術は今日ではいろいろな学問的な研究と総合とを必要としている。長い間地球上に産するもろもろの物質を考究した上でなければ、巧妙に薬味を用いたり、ある食物の苦味を消したり、あるご馳走を一層美味にしたり、最良の成分を発揮させたりすることなどできるものではない。ヨーロッパの料理人は特にこのような驚嘆すべき混ぜ合わせを行う術において優れている」(『美味礼讃』下巻、p. 135。) この文章のうち、「料理人は」以下は、アリベールの『情念の生理学』からの引用である。(Jean-Louis ALIBERT, *op. cit.*, t. I, p. 196)。サヴァランは、引用箇所のページを『味覚の生理学』の中で註として示している。

と自体には同意しているものの、その理由については意見を異にしたのである。

ところでサヴァランは、その温和な人柄で知られていた。サヴァランの死後に発刊された『味覚の生理学』に前書きとして「著者について」を記した医師リシュランは、サヴァランについて「何よりも温厚で、協動的で愛すべき人物であった」と述べている⁽¹⁸⁾。サヴァラン本人も同書の中で、自分自身を綴った部分に対する、想定される読者からの批判の声を危惧しつつも、自身を「人の悪口を言わない人間は少しは自分を寛大にあつかう権利を持っているのだ。ついぞ人に怨恨憎悪の感情を持ったことのない私が、なぜ私自身に対してだけ好意を持つてはいけないのか⁽¹⁹⁾」と表現している。実際、『味覚の生理学』に現れる逸話は、ほとんどが穏やかで楽しげなものであり、人を否定する要素は全くと言っていいほどない。そのようなサヴァランが、アリベールの著書の著者名と引用箇所を明記しながら、その著者の意図とは真逆の指摘をしたのであるから、いささか直裁にすぎるように思われる。そこには、エピクロスを否定し、徹底して節制の徳を重んじるアリベールに対しての批判が見え隠れする。アリベールは、『情念の生理学』において、夢想の中で目にしたという、節制についてのエピクロスとピタゴラスの対話を書き記す⁽²⁰⁾。そして、その対話に先立つ序文において、エピクロスの思想が「エゴイズムと自己愛によるもの」であると痛烈に批判する⁽²¹⁾。加えて身体にかまけるばかりに哲学をいわば即物化したことにより批判を受けたのだと述べる⁽²²⁾。対話は、エピクロスとピタゴラスが節制と快楽について交互に話すうちに、エピクロスがピタゴラスに説得されるという構図をとっている。そして次の言葉で対話は締めくくられる。「エピクロスは苦しみを忘れさせる。しかしピタゴラスは、苦しみを癒すのだ⁽²³⁾」。

それでは、サヴァランはエピクロスの思想をどのように捉えていたのだろうか。『味覚の生理学』にエピクロスの引用をした箇所は見当たらないものの、省察二十七「料理術の哲学的歴史」には以下のような箇所がある。

ギリシアのぶどう酒は、今でも最上等と認められるが、利き酒の名人に吟味され、最も口当たりの良いものから最も強烈なものに至るまで、順々に分類された。ある宴会ではその全階梯を全部試みた。(…)

舞踏、賭け事、その他、色々な遊びが夜更けまで行われた。人は、あらゆる毛孔から逸楽を呼吸した。そして、幾人ものアリスチポスがプラトンの旗を掲げてきながら、エピクロスの旗のもとに降伏した⁽²⁴⁾。

つまりサヴァランは、エピクロスの思想をプラトンに対峙させ、当時の人々は食を含む快楽に関してはエピクロスを選択したのだと述べる。そもそもエピクロスの哲学は、「プラトンの哲学と顕著に対立」していた⁽²⁵⁾。エピクロスは、「直接的な感覚や感情を証拠として位置づけ、それをプラトンやアリストテレスの論理的分析と対比させよう⁽²⁶⁾」とした。エピクロスは、彼らの世界記述の基本原則の多くを拒絶した。原子と空虚で構成

(17) 加藤三和はサヴァランの生理学を道徳と結びつけ、その着想の源はアリベールであると述べている。「ブリア＝サヴァランにおいて生理学は、身体的快楽を語るためだけでなく、味覚が引き起こすこの快楽を軽やかに肯定する力を持ち、さらにそれを道徳の問題へ連結することを可能にしている。そしてこのような着想の源は、ブリア＝サヴァラン自身ではなく、また同時代の美食家たちの書物でもなく、むしろ生理学と道徳を結びつけたアリベールに負うところが大きいといえるだろう。」(前掲論文, 2022, p. 67)。

宮川知子, 前掲論文, p. 73.

(18) *Physiologie du goût, ou méditations de Gastronomie transcendante ouvrage théorique, historique et à l'ordre du jour, dédié aux gastronomes parisiens, par un professeur, membre de plusieurs Sociétés littéraires et savantes. Paris, chez A. Sautelet et Cie libraires, place de la Bourse, près la rue Feydeau. 2^e Edition, 1828.* 第二版には、リシュランによる「著者について」が無記名で載せられている。1838年のJust Tessierの版には、表紙にリシュランの名前が記載されている。

(19) 『美味礼讃』下巻, p. 159. (P. G., p. 304).

(20) Jean-Louis ALIBERT, *op. cit.*, t. I, p. 225-226.

(21) *Ibid.*, p. 216.

(22) *Ibid.*, p. 218.

(23) *Ibid.*, p. 268.

(24) 『美味礼讃』下巻, p. 95. (P. G., p. 258).

(25) A.A. ロング, 前掲書, 2003, p. 23.

(26) 同上, p. 30.

されるエピクロスの世界にとって、プラトンのアイデアは必要のないものであった⁽²⁷⁾。

『味覚の生理学』、同省察の中でサヴァランは、「ギリシア学者にしては、かなりくいしんぼうだった⁽²⁸⁾」という知人の訳したイリアッドのラテン語訳をそのまま引用し、自身でフランス語に訳している。それ以外にも、『味覚の生理学』には例えばホラチウスやセネカなどの句のラテン語での引用がかなりの頻度で現れる。読書家を自負し、5つの言語と2つの古典語を能くしたというサヴァランは、ルクレティウスをラテン語で楽しみ、ギリシア語でエピクロスの書簡に触れていた可能性も十分に考えられる。

ルクレティウスの *De rerum natura* (『物の本質について』) の最初のフランス語訳は 1514 年に出版された⁽²⁹⁾。モンテーニュが所持していた 1563 年の校訂版には、多くのメモや注釈が書き込まれており、『エッセー』にもルクレティウスからの 149 回の引用が見られる⁽³⁰⁾。スティーブン・グリーンブラッドによれば、「モンテーニュは、死後の世界の悪夢によって道徳を強制するというやり方を軽蔑するルクレティウスに共感していた」という⁽³¹⁾。この考えは、そのままサヴァランにも当てはまるように思われる。17 世紀には、ピエール・ガッサンディにより、エピクロス哲学復興の推進が行われた⁽³²⁾。

また、18 世紀から 19 世紀にかけてのフランスは、ルクレティウスの著書が啓蒙主義に大きな影響を与え、フランス語への翻訳が多数刊行された時期である。サヴァランは、ルクレティウスに関しても省察「料理術の哲学的歴史」の中で砂糖に触れたところに自ら註を付け「ルクレティウスがなんと言っているように古代人は砂糖を知らなかった⁽³³⁾」と一言その名前を出している。それでは、サヴァランの生きた時代において、ルクレティウスはどのように受容されていたのだろうか。

II. 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてのエピクロス主義の受容

18 世紀前半においては、フランスで高まる無神論を危惧する声がカトリックの思想家よりあがっていた。科学的発見に伴い、物質の原子構造や宇宙の体系に関して唯物論的仮説を支持するようになり、世界の起源や道徳の基盤についての議論が関心を集めていた。そのような中、神の存在に対する問いが公の場で議論されるようになってきた⁽³⁴⁾。

枢機卿メルキオール・ド・ポリニャックは、40 年間以上もかけ、死の直前まで、ラテン語で *l'Anti-Lucrèce* (『反ルクレティウス』) を記した。この書籍は未完であったが、*De rerum natura* (『物の本質について』) に対抗して書かれ、彼の死後の 1747 年に出版された後、時を待たず 1749 年にフランス語訳が刊行された。また、ヴォルテールが 1733 年に記した *Le Temple du Goût* (『趣味の神殿』) では、ルクレティウスに対峙するものとして枢機卿が描かれており、そのモデルはポリニャックとされる⁽³⁵⁾。

『味覚の生理学』の序には、サヴァランが暗記するほどに読み込んだと自ら述べる幾人かの作家の名前が挙げられているが、なかでもヴォルテールの名は最初に記されている⁽³⁶⁾。このことからわかる通り、サヴァランがまずはヴォルテールを通してルクレティウスの思想に触れた可能性も十分にあるだろう。ヴォルテールは 1756 年にもルクレティウスの *De rerum natura* (『物の本質について』) の一部を翻訳しつつ、ルクレティウス

(27) 同上, p. 30-31.

(28) 『美味礼讃』下巻, p. 89. (P. G., p. 254). 文脈に合わせて訳を改めた。ギリシア学者で知人のデュガ・モンベル氏についてわざわざ、くいしんぼうと指摘するサヴァラン特有の楽しげなトーンが伝わってくる。

(29) 1563 年にはコレージュ・ロワイヤルのギリシア語とラテン語の学科長であったランビヌスが校訂本を出版した。(小池澄夫, 瀬口昌久, 『ルクレティウス「事物の本性について」—愉しや、嵐の海に』, 岩波書店, 2020, p. 151)。

(30) 小池澄夫, 瀬口昌久, 『ルクレティウス「事物の本性について」—愉しや、嵐の海に』, 岩波書店, 2020, p. 151-152.

(31) スティーブン・グリーンブラッド, 河野純治訳, 『一四一七年、その一冊が全てを変えた』, 柏書房, 2012, p. 302.

(32) ジャン・ブラン, 前掲書, p. 24.

(33) 『美味礼讃』下巻, p. 110. (P. G., p. 269). ルクレティウスは、砂糖でなく蜂蜜について述べている。

(34) Philippe Chométy et Michèle Rosellini, *Traduire Lucrèce : pour une histoire de la réception française du De rerum natura (XVIIe-XVIIIe siècle)*, Honoré Champion, Paris, 2017, p. 63. また、フェヌロンの *Démonstration de l'existence de Dieu, tirée de l'art de la nature* (1713) には、エピクロスとその哲学が批判的に取り上げられている。

(35) Philippe Chométy et Michèle Rosellini, *op. cit.*, p. 63.

(36) 『美味礼讃』上巻, p. 43. (P. G., p. 36).

とストア派の人物との対話を著している⁽³⁷⁾。

18世紀のルクレティウスの翻訳は、17世紀後半に出版された *Des Coutures* によるものが4度の版を重ねた(1692, 1695, 1708, 1742)。その1742年版のタイトルは *De l'origine de la nature et de toutes choses, de la création de l'univers et du gouvernement de la Providence selon le système d'Epicure* (『自然と万物の起源、宇宙の創造、そしてエピクロスの体系による神意(プロヴィデンス)の統治について』)となっており、このタイトルからフランスにおいて唯物論的思考が進みつつあったことがうかがわれるとの指摘がされている⁽³⁸⁾。そしてまた、*De rerum natura* (『物の本質について』)は、1768年に匿名での翻訳が出版される。*De rerum natura : Lucrece, traduction nouvelle avec notes par M. L. *G.** (『物の本質について：ルクレティウス、M. L. *G.*による注釈付き翻訳』)である。**G.**で隠された、その本名はラグランジュ(Lagrange)であり、ラグランジュは、過去の翻訳者たちの翻訳を鋭く批判した。ラグランジュが重要視したのは、何よりもルクレティウスを哲学的正確さをもって翻訳し、エピクロスの教義を分析することであった。英語への翻訳で高い評価を得ていたトーマス・クリーチ⁽³⁹⁾の註や、ガッザンディを参照し翻訳を仕上げた。ラグランジュは、無神論者で唯物論者のバロン・ドルバックより庇護を受けていた。ラグランジュがルクレティウスの原子論に使用した語彙からは、唯物論的思想に親しんでいたことが窺われるという。一方、ルクレティウスの批判した宗教«*religio*»の語に関しては、その翻訳に躊躇が見られ、「宗教」と訳さずに、わざわざ「迷信」などと訳した⁽⁴⁰⁾。

ラグランジュが翻訳を出版したまさに同じ年、1768年に、*De rerum natura*の散文での翻訳が完全に匿名で啓蒙主義の書籍の出版社、パンコック(Panckoucke)より出版される⁽⁴¹⁾。この翻訳は、詩の大部分を省き、議論の焦点をエピクロスの原子論に絞ったものであった。また、その語彙に関しても、古めかしい哲学用語を避け、「物質»«*matière*»という語を数多く使用し、物理学的思想を第一に考えた。しかしやはり宗教に関しては、*religio*を「宗教»«*religion*»とは訳したものの、当時のフランス社会を鑑みて、異教の神々たちのことである、と明記する心遣いを忘れなかった⁽⁴²⁾。

つまり、フランスにおけるルクレティウスの翻訳の歴史は、そこに描かれた神の存在をどのように扱い、翻訳に反映させるかを逡巡した歴史でもあったように思われる。先に述べたラグランジュの翻訳は、1794年、1799年、1821年、1823年と多くの版を重ねた⁽⁴³⁾。それにもかかわらず、19世紀に入ってから文献学者のNicolas-Eloi Lemaireが、*De rerum natura* (『物の本質について』)を含めたラテン文学古典のコレクションリストをルイ18世に提出した際には、ルクレティウスはリストから除かれたという⁽⁴⁴⁾。

先に述べたとおり、サヴァランはヴォルテールを愛読していた。それ故、ヴォルテールの影響を直に受けたために、それに倣い、ルクレティウスを介したエピクロスに対するサヴァランの思想が形成されたのだと考えるのは早計かもしれない。サヴァランが私淑したと自ら述べる作家の中には、フェヌロンも含まれていた⁽⁴⁵⁾。フェヌロンは、ヴォルテールとは異なり、ルクレティウスの思想を批判的に捉えていた。これらの作家をこよなく愛したサヴァランは、この両者の必ずしも一致しない、ルクレティウスに対する意見を咀嚼しつつ、自身で原典にあたり、エピクロス主義への自身の考えを形成していったと考えるのが順当であろう。では、どのような点において、サヴァランの思想とエピクロスのそれが重なるように思われるのか。

(37) Philippe Chométy et Michèle Rosellini, *op. cit.*, p. 66.

(38) *Ibid.*

(39) ヴォルテールもこの翻訳を素晴らしいと認め、「フランスにもこのレベルの翻訳者はいないものか」と述べた。Philippe Chométy et Michèle Rosellini, *op. cit.*, p. 66.

(40) Philippe Chométy et Michèle Rosellini, *op. cit.*, p. 68-69.

(41) *Ibid.*, p. 69.

(42) *Ibid.*, p. 70.

(43) *Ibid.*, p. 72.

(44) *Ibid.*

(45) 『美味礼讃』上巻, p. 43. (*P. G.*, p. 36).

Ⅲ.『味覚の生理学』にみられるエピクロス主義との接点

『味覚の生理学』には、その第一部として、科学的、生理学的な記述と随想が織り混ざった三十の「省察」、第二部には「つなぎの言葉」に続き、「ヴァリエテ」として随想、詩篇、レシピなどが収められている。サヴァラン自身が、食卓の快楽を考察するにあたり、単なる料理本ではないものを書きたかった、とその「序」で述べている⁽⁴⁶⁾ことからわかるように、その内容は多岐に渡っている。とはいえ、第一部全体をしめる三十の「省察」の後半部分に当たる省察十七「休息について」、省察十八「眠りについて」、省察十九「夢について」そして、省察二十六「死について」には、食の文脈においては語られることのあまりない言説が挟まれていることに気づかされる。まさにそこに、エピクロスの思想が垣間見られるのである。

まず、省察十七「休息について」において、このような記述が見られる。

諸器官はかつてあんなに熱心に呼び求めたものを退け、靈魂は感覚に飽き飽きし、そこに休息の時がやってくる。(…)自然は慈母のごとく、この休息にあらゆる保存的行為に対すると同じように、大きな快楽を持たせている。休息する人間は全身に何ともいえない幸福を感じる。両の腕はそれ自体の重さでぐったりとたれる。筋肉は弛緩し頭脳はすっとしてくる。官能は静まり感覚は鈍る⁽⁴⁷⁾。

このサヴァランの記述には、靈魂 « âme », そして自然 « nature » という言葉が含まれている。この語彙は、ルクレティウスのよく使用するものである。そのルクレティウスは、睡眠についてどのような記述を行ったのか。

まず第一に睡眠が生ずるのは、魂の集合が全身に散解し、一部が外部へ放出されて消え、一部が一層密に凝集して奥深く引っ込んでしまった時に起こってくるのである。即ち、四肢が弛緩し、たるんでくるのは、要するにかような時に起こることなのである。こういう感覚が我々の中に起こるのは、魂の作用によるものであるということ、疑問の余地がない⁽⁴⁸⁾。

先に *De rerum natura* (『物の本質について』) を翻訳したラグランジュは、animus を « âme » と訳し、この第四巻の冒頭に注釈を加えている⁽⁴⁹⁾。そして、この部分においても âme の言葉が使用されている⁽⁵⁰⁾。まさに魂と体の弛緩を結びつけたこの表現から着想を得て、先のサヴァランの記述がなされたと考えても間違いではないだろう。

また、『味覚の生理学』の省察十八「眠りについて」に続く、省察十九「夢について」においては、夢精に対する「悦楽的な夢において、ほとんど目の覚めている時と同じように自然がその目的を達することは、人のよく知るところである⁽⁵¹⁾」といった記述が見られる。18世紀後半のフランスにおいては、夢精は健康的、および道徳的、宗教的観点から問題視されていた⁽⁵²⁾。この記述も、ルクレティウスの「成熟の機がきて、体内に種子を生じたものには、外部の肉体からも美しい顔と美麗な色とを伝える映像が来て、(…) 往々多量の液体

(46) 『美味礼讃』上巻, p. 39. (P. G., p. 33).

(47) 『美味礼讃』上巻, p. 272. (P. G., p. 195).

(48) ルクレティウス, 樋口勝彦訳, 『物の本質について』, 岩波書店, 1961, p. 195.

(49) Lucrèce, *De la Nature des choses*, M. L*.G **, Chez Bleuet, 1768, p. 22.

(50) « Le sommeil naît en nous, quand l'ame se décompose dans la machine, & qu'une de ses parties est chassée au dehors, tandis que l'autre se ramasse & se condense davantage dans l'intérieur du corps. Alors les membres doivent se délier & paraître flottans. En effet c'est à l'ame que nous devons le sentiment, ... » (Lucrèce, *De la Nature des choses*, M. L*.G **, Chez Bleuet, 1768, p. 93).

(51) 『美味礼讃』下巻, p. 15. (P. G., p. 202).

(52) Samuel-Auguste Tissot. *L'Onanisme : dissertation sur les maladies produites par la masturbation*, 1764, p. 233. ここには、夢精により難聴となった男の挿話がされている。フランス語の初版は1760年であるが、この書籍は成功をおさめ、増補版の第3版が1764年に出版された。

の種子を注ぎだして、着物を汚すに至るものもある⁵³⁾」に対応していると言えるだろう。サヴァランは、ルクレティウス同様、夢精についても、その頃主流であった道徳的、宗教的感情を交えることなく、何の先入観もなくその現象を描写している。

また、普段見る夢の内容についてもサヴァランは以下のように述べ、迷信めいたことを排除する。

われわれは時に夢の中で随分奇妙な考えにかき乱されるけれども、少し落ち着いて考えてみると、いずれも皆思い出ないし、思い出の組み合わせに過ぎないことがわかる。(…)

要するに何人もそれまでに全く知らなかった事柄を夢に見たためしはないのである。だから私は、夢は感覚の記憶なり、と言いたい⁵⁴⁾。

サヴァランは、夢を脳に刻まれた物質的なイメージの再現として、宗教的啓示からは切り離されたものとして記述する。これはまさにルクレティウスの夢にかんする記述と重なっている。

又、ほとんど誰でも、何んなことにでも熱中して、これに執着していれば、その事が、又我々がどんなことにでも深く没頭し、同様に心をやや張りつめていたことがあれば、その事がよく夢の中に現れてくるように思われる。弁護士は訴訟演説をしているところとか、法文を照合するところとかを、将軍は戦争をしているところとか、戦闘に従事しているところとかを、又船乗りは風を相手に始めた奮闘に務めているところを、又我々はこのようなことを論じ、万象の本質を常に探求しているところとか、又既に明らかにしたことを母国語の文で表現しているところを夢にみる⁵⁵⁾。

それに加えて、ルクレティウスの「睡眠中に重大なことを口走り、自分の行為を証拠立ててしまうものも少なくない⁵⁶⁾」に対応するかのように、サヴァランは、「ぼんやりした眠りの最初の瞬間において、意思の働きはまだ続いている。目をあけようと思えばできる。(…)すべてのものが眠ってはいない、とメセナスは言ったが、実際この半醒状態のうちに、少なからざる夫が忌まわしい証拠を握ったのであった⁵⁷⁾」と記述している。これは、妻の浮気を示唆した表現と思われるが、まさに、寢言についても、ルクレティウス同様、それを発した自分自身の行為と地続きであることを示している。

以上のように、『味覚の生理学』においてサヴァランが扱う題材は、その表現の仕方に至るまでルクレティウスの *De rerum natura* (『物の本質について』) と似通っているものがいくつも見られ、そこではサヴァランが物事を先入観なく単なる事象として捉えていることが確認できた。しかし、その類似はそこにとどまらない。サヴァランの思想のさらに本質的な部分、つまり神や死、道徳に対する考え方において、エピクロスの影響を受けたと思われる表現が見受けられるのである。

IV. サヴァランと人間存在

サヴァランは、省察十九「夢について」において、自身の夢の体験を分析し、以下のように語っている。

つい2.3ヶ月前のことだが、私は眠っていながらある全く異常な快楽を感じた。それは、私の存在を組み立てている全ての微粒子の甘美な戦慄とでも言うべきものであった。それは、魅力に充満した一種の蟻走感、頭のてっぺんから足の先まで、表皮から発して骨の髄にまで及ぶものだった⁵⁸⁾。

53) ルクレティウス、前掲書、p. 199.

54) 『美味礼讃』下巻、p. 16. (P. G., p. 203).

55) ルクレティウス、前掲書、p. 197.

56) 同上、p. 199.

57) 『美味礼讃』下巻、p. 12. (P. G., p. 197).

58) 『美味礼讃』下巻、p. 23. (P. G., p. 207).

ここで注目したいのは、サヴァランが「私の存在を組み立てている全ての微粒子」« toutes les particules qui composent mon être » という表現をしていることである。この « particules » の語は、エピクロスの原子論を彷彿させないだろうか。ルクレティウスは、*De rerum natura* (『物の本質について』) の第一巻でこう述べる。

君のために天体に関し、また神々に関する最高の理論を、私は始めようとし、万物を形成する原子を説きあかそうとしているのだから。この原子でもって、自然は万物を作り、増加させ、成育させるのだということを、また死亡したものは、同じく自然が、これを再びこの原子に還元分解してしまうのだ、ということ説き明かそうとしているのだから⁵⁹⁾。

つまり、ルクレティウスによれば、全てものは原子でできており、死に至っても原子に戻る。そして、もちろん人間の存在も例外ではなく「我々人間は全て天空の原子から生じているものだとしなければならない。天空こそは万物共有の父であり、これより育ての母なる大地は流れる水の滴を受けて豊かに富み、繁茂する穀物を、豊かなる樹木を、さては人類を生み、野獣のありとしあらゆる世代を生み、食料を与う⁶⁰⁾」と主張するのである。先に見たように、サヴァランも自身の体は、微粒子から組み立てられているのだと述べている。この微粒子と訳された « particule » の語は、『味覚の生理学』のほかの部分においても数多く使用されている。省察二「味覚について」においても « particules sapides », 「味のある particules」という表現が多く見られる⁶¹⁾。この省察で、サヴァランは味覚のメカニズムについて、「舌は、その表面に相当数多く散在する乳頭によって、それが接触する物体の味を含んだ可溶的な部分を吸い込む」と述べている⁶²⁾。そして、そのなかの「味の感覚」という項目で、「味のある particules」によって人は味を感じることを説明している。実は、この味覚に関する記述もルクレティウスに見られる。「また我々が風味を感じずる機関たる舌と口蓋とは、あまり説明を要しないし、努力も必要ない。まず第一に、我々は口の中で風味を感じずるが、これは咀嚼することによって、食物を絞り出すのであって、あたかも水をいっぱいを含んだ海綿をたまたま誰か手で押ししぼり水気を抜くようなものである。(…) この場合、滲み込んでいく汁の原子がやさしく滑らかであれば、舌についているじぶじぶ唾液を滲みだす湿った部分を、汁の原子がやさしく接触し、やさしく撫でるのである⁶³⁾」。サヴァランがその大きなテーマとした「味覚」すらも、ルクレティウスは非常に良く似た形で記述しているのである。またサヴァランは、省察五「食物一般について」の「食物の成分」という項目の中で、この同じ « particules » という語を食物としての肉類を構成する « particules » 「諸分子」として使用し、それが「われわれ（人間）を形作っている諸分子と甚だよく似ている」と述べている⁶⁴⁾。このことからサヴァランがルクレティウスの考えおよび表現に倣い、食物や人間を組み立てる « particules » を分析していることがわかる。

では、宗教に関する両者の考えには、共通点は見られるのだろうか。ルクレティウスがカトリックの社会において受け入れられなかったのは、何よりもまず、その神に対する考え方によるところが大きい。先に述べたように *De rerum natura* (『物の本質について』) のフランス語への翻訳に際しても、常にその点が問題とされた。ルクレティウスは、*De rerum natura* (『物の本質について』) の第一巻にこのように記している。

その理由は、まず第一に、私は広大な問題を説き、ひいては人の心を宗教という固い結びから解き放とうと努めんとするからであり、第二には、この難解な問題を、すべて詩という魅力を用いて、私はいとも明快な詩に歌わんとするからである⁶⁵⁾。

59) ルクレティウス, 前掲書, p. 12.

60) 同上, p. 105.

61) 『美味礼讃』上巻, p. 63. p. 65-66. (P. G., p. 47. p. 49). また、この particule の語にかんして、関根はそれぞれの場面で、「微粒子」、「部分」、「小部分」、「分子」、「諸分子」と訳している。

62) 『美味礼讃』上巻, p. 63. (P. G., p. 47).

63) ルクレティウス, 前掲書, p. 183.

64) 『美味礼讃』上巻, p. 103. (P. G., p. 76).

ルクレティウスは、宗教という縛りから人々を解放しようとした。この記述は、第四卷冒頭でも繰り返される。それ以外でも、「自然は自由であり、(…) 神々とは関係ないことがわかってくるであろう⁶⁵⁾」の記述や、その他数多くのこのような主張がみられる。

では、サヴァランはどのような宗教観を持っていたのだろうか。『味覚の生理学』には、宗教を否定したり、サヴァラン自身が無神論者であると表すような記述は全く見られない。当時のフランス社会では、無神論の考え方は主流ではなく、そのためにルクレティウスのフランス語への翻訳者たちが、様々な工夫を凝らしてきたことは先に見た通りである。人との軋轢を好まないサヴァランであるからゆえ、あえて、表立って宗教を否定することのないよう注意を払っていたよう思われる。

サヴァランが宗教について多少否定的に述べたのは、省察十四「食卓の快樂について」においてである。人間の快樂について説明し、過去においては、こういった快樂を司る神々がいたのではないかと述べる。そして「厳格な新しい宗教は、すべてそうした偶像を破壊してしまった。バッカス（酒神）もキューピッド（愛神）も、コモス（食卓の神）も、アルテミス（狩猟の神）も、今ではもう詩の中で回想されるに過ぎない。だが事柄それ自体は今でも残っている。だから我々は、あらゆる信仰の中で最も厳肅な信仰の元にありながら、結婚の時も洗礼の時も、いや葬礼の時にすら、ご馳走を食べるのである⁶⁷⁾」と続ける。つまりギリシアの神々がいなくなった後の、厳肅な信仰下においても、食卓の快樂は存在する。この複数形で記述された「新しい宗教の厳格さ」« La sévérité des religions nouvelles »とは、キリスト教を念頭においているに違いない。サヴァランは、しかし、その新しい宗教を複数形にすることで、宗教批判を巧妙に避けた。このように、宗教を語ることに對して慎重であったサヴァランではあるが、省察十「世の終わりについて」においては、宗教や宇宙に対する考えを率直に表しているように思われる。

拒みえない幾多の記念物が我々に教えている通り、我々のこの地球はすでに何度も徹底的变化を被ったので、それはその都度世の終わりであったのだ。(…)

すでにしばしば人はそのような変動が今にも来そうに思った。いや昔天文学者のジェローム・ラランドの予言した彗星が現れたのを見て懺悔に行ったという人たちも、現にたくさん残っている。

その時の話を聞いてもわかるが、人間はそういう天変が起こるのを見ると、やれ天の懲らしめだとか、やれ悪魔がどうしたとか、最後の審判のラッパが鳴ったとか、いずれもおっかないお景品をくつつけたがるものらしい⁶⁸⁾。

これらは、エピクロスのかげに非常に近い。人間は、天変地異が起こったときに、その理由付けとして、神の怒りであると考えてしまうものだということのである。そしてこれは、まさに以下のルクレティウスの主張そのものではないだろうか。

例えば、神々は全く無関心な生活を送っているのだということを正しく知っているものでも、時に物事はすべて、殊に頭上天空の世界に見受けられる現象の場合、如何にして運行され得るのかに不審を抱くと、再び以前の迷信に逆戻りして、あり得べきこととあり得べからざることを、要するに如何にしてあらゆるものには能力が限定され、深く打ち込まれた限界があるかということに全く無知な哀れな者共が万能なりと信じているもの（神々）を厳しい主人なりと信ずるようになってしまうからである⁶⁹⁾。

ここからも、サヴァランがエピクロス主義に大いに賛同していたことがわかる。

65) ルクレティウス, 前掲書, p. 52.

66) 同上, p. 109.

67) 『美味礼讃』上巻, p. 237. (P. G., p. 169).

68) 『美味礼讃』上巻, p. 192. (P. G., p. 139-140).

69) ルクレティウス, 前掲書, p. 214.

また、ルクレティウスは、宇宙の死滅と誕生を語り、誕生により生じる様々の事柄を記述している。

即ち、宇宙は死滅すべき、且つまた同時に誕生すべき物質から構成されているということ、又物質のその集合が如何なる工合に大地を、天空を、海を、星群を、太陽を、又月の球体を築き上げるに至ったか、次いで如何なる生物が地上に生じたか、又何が如何なる時にも嘗て生じた事がなかったか、又如何にして人類が相互にももの名称を用いて、変化に富む言語を使用しはじめたか、又如何にして神々を恐れる念が心に侵入し、その念がこの地上に神殿を、湖水を、森を、祭壇を、神々の像を、神聖なるものとして保持するに至ったか、という諸点である⁽⁷⁰⁾。

この記述に対応するかのように、省察「世の終わりについて」においてサヴァランは、「滅びの季節の終わり」にあらゆるものが「ことごとく滅び去」り、「また別の状況が別の種や芽生えを育て上げるまでは、地球はただ音もなく転がって行くだろう」と述べ、「こういう災いの原因は依然として茫漠たる空中に散らばったままであって、ただの幾億里すら我々に接近はしない」とする。さらに、地球最後の日を迎えるまでに人類がどう変化するか、その「宗教感情や信仰や諦念」その他に思いを馳せ、それらにかんする自身の意見は詳らかにしないものの、読者にそれらの問題を考える楽しみをあたえよう、と述べるのである⁽⁷¹⁾。ルクレティウスが宇宙の誕生に際して生じる事物を記述したのに対応するかのように、サヴァランが、宇宙が滅亡へ至るまでに生じる事象を考察しようとしたことは興味深い。

V. サヴァランと死

サヴァランは、死についてもルクレティウスと重なる考えを持っていた。

ルクレティウスは、死について以下のように述べる。

我々を領する眠りが永遠であろうとかまわない。自分自身を恋う気が我々を動かすことは全くないのだから。ところが、人が眠りから醒めて我に帰る時というのは、肉体の全般に広がっているあの原子が決して感覚運動を離れ去っているのではないことである。であるから、死は我々にとって、なおのこと大したことではないということになる。——我々が取るに足りないことだと考えていることよりも、更に取りに足りないことがあるとすれば、死は正にそれである。即ち死の結果としては、素材（原子）の量には、これより一層大きな飛散が起きるということであって、一度生命のこの冷たい中断にとらえられた者は、決して目覚めて起きないというだけのことである⁽⁷²⁾。

ルクレティウスは死を「取るに足りないもの」と考えていた。原子が飛散して、生命が中断するだけだというのである。また、「死すべき人間の生命には、一定の限度があって、我々が死ぬことのないように、死を避けることは不可能なことである⁽⁷³⁾」とルクレティウスは死を単に不可避なものとして捉えた。では、サヴァランは死をどう捉えていたか。

サヴァランは、省察二十六「死について」の冒頭にセネカの「万物は死滅する。死は法則であって刑罰ではない」というラテン語での引用をエピグラムとしてつけている。そして、このように章を始める。

造物主は、人間に6つの大きな必然を課した。出生、行動、飲食、睡眠、生殖および死がそれである。死とは感覚諸関係の絶対の断絶であり、生命力の絶対の消滅であって、肉体を分解の法則にゆだねる。

⁽⁷⁰⁾ 同上, p. 213-14.

⁽⁷¹⁾ 『美味礼讃』上巻, p. 193-194. (P. G., p. 139-140).

⁽⁷²⁾ ルクレティウス, 前掲書, p. 150.

⁽⁷³⁾ 同上, p. 158.

以上のいろいろな必然は、いずれもいくらかの快楽の感覚に伴われて、耐えやすくなっている。死でさえも、それが自然である時には、すなわち体が成長、成熟、老衰などの各過程を経過した末のことであれば、やはり陶酔がなくはない^[74]。

サヴァランは、死を「生命力の絶対の消滅」とする。これは、ルクレティウスにも通じる考えである。そして、そこに「陶酔」すらあると述べるのである。その中で、サヴァランは死なんとする93歳の自分の大お婆の逸話を語る。最後にサヴァランのついた極上のワインを飲み干した大お婆は、「この最後のサービスを本当にありがとうよ。お前も私みたいな年になれば、死が眠りと全く同じように一つの要求になるってことがわかるだろうよ^[75]」といって亡くなった。

そして、「人体の最後の破壊と各人の最後の瞬間を、あれほどの真実と哲学とをもって描いた^[76]」友人で医師のリシュランの『生理学概論』を長く引用し、「死について」の章を閉じる。

瀕死者は嗅がなくなり、味わなくなり、見えなくなり、聞こえなくなる。でも触覚は残る。床の中で身動きし、腕を外に出し、始終体位を変える。すでに言ったように、母の体内で動く胎児のそれに似た運動をする。死は瀕死者に少しも恐怖を与えない。全く彼には思想感情がないのである。人間は生き始めた時と同じように、その意識なしに生き終わるのである^[77]。

この、医師による極めて生理学的な描写を「真実と哲学をもって描いた」とし、その書物からの引用を行なったところに、サヴァランの死についての考えが凝縮されているように思われる。当時の、死が宗教的観点から恐れられていた社会において、サヴァランは、死を客観的に自然な事象として捉えたのである。

それだけではなく、第二部「ヴァリエテ」の中で「詩史」と名付けた項において美味を讃える古来からの数編の詩を引用する。その中には、サヴァラン自作の詩も数編含まれており、省察二十六「死について」の一部であるべく書かれた一編として、まさに死ぬ直前の状況を歌として詠んだのである。それは、「今はのきわみ——生理学的ロマンス——」と題されており、以下がその二節目である。

われ祈らんとすれど、頭脳従わず
語らんとすれど、言葉いはず
かすかなる響きわれを不安にし、
何者とも知らず我が前に踊る
ああ、もはや見えず。わが胸塞がり、
最後の息は漏れ出でんとして
静かにわが唇の上にたゆとう
ああ、われまさに死なんとなす^[78]。

副題を「生理学的ロマンス」と名付けられたこの詩は、歌うことを念頭において作られた。この詩の題は、「今はのきわみ」«L'agonie», つまり直訳すると「断末魔の苦しみ」であり、キリスト教において«L'agonie»は、魂と肉体の戦いとも捉えられ、恐れられてきた。それに対しサヴァランは「…私はこれに曲をつけようと思ったがうまくいかなかった。誰かがきっと私よりうまくやってくれるだろう。(…)」ことに二節目は病人が悪くなるところをはっきりとさせなければならない^[79]と述べるのである。ロマンスとは、18世紀から19世紀に

[74] 『美味礼讃』下巻, p. 81. (P. G., p. 248).

[75] 『美味礼讃』下巻, p. 82. (P. G., p. 249).

[76] 『美味礼讃』下巻, p. 82-83. (P. G., p. 249).

[77] 『美味礼讃』下巻, p. 84. (P. G., p. 250).

[78] 『美味礼讃』下巻, p. 256. (P. G., p. 381).

かけては、叙情的で穏やかな愛の歌やバラードを指す。そこに、リシュランが『生理学概論』で述べた、人間が死に至る生理学的な様子を盛り込み歌詞としようとし、「病人が悪くなるところをはっきり」させる曲をつけたいというのである。「L'agonie」は、サヴァランにとって、断じて宗教的な魂と肉体の戦いではなく、生理学的な病気の悪化と死を表す。「教授つくる⁽⁸⁰⁾」とわざわざ記された、このブラックユーモアとでもいうべき詩からは、死にたいして何の恐れも抱いていないサヴァランの姿が浮き彫りとなる。

おわりに

『味覚の生理学』を詳細に追っていくと、愉しげな食にかんする省察の中に紛れ込んだ、サヴァラン自身の神や死への考え方が明らかとなった。温和なサヴァランらしからぬ、アリベールの『情念の生理学』からの挑発的な引用から見えてきたことは、アリベールの宗教観、および道德観に基づいた食の節制を単に批判したのみにとどまらない。そこには、ルクレティウスを通したサヴァランの隠れたエピクロス主義への賛同が窺われた。サヴァランは、迷信を嫌い、できる限り科学的に物事を捉えようとした。また、死に関しても、宗教に対する表立った批判は一切行わずに、軽やかに宗教的な死の恐怖を否定した。その穏やかで楽しげな文体で彩られた『味覚の生理学』の中には、サヴァランという隠された一人の唯物論者の姿が立ち現れてくるのである。そしてそれは、とりもなおさずルクレティウスの思想と一体となっている。

ルクレティウスの *De rerum natura* (『物の本質について』) が、女神ウェヌスへの賛歌により幕を開けることは、つとに知られている。サヴァランによる『味覚の生理学』は、第一部が、三十の「省察」からなり、第二部には「ヴァリエテ」として随想、レシピ、詩などが組み込まれていることは先に述べた。サヴァランは、第一部の最後を飾る省察三十を「ブーケ」と題し、サヴァランの創った「ガステリア」なる味覚の女神への賛歌を謳っている。これは、ルクレティウスへの隠された目配せであるように感じられる。エピクロスとサヴァランがそれぞれ思索の中心に据えた、これらの女神たちのつかさどる、愛と食の快樂について掘り下げ、サヴァランの考える快樂について明らかにすることを今後の課題としたい。

(79) *Ibid.*

(80) *Ibid.* サヴァランはこの著書の中で、自身を「教授」と呼んでいる。『味覚の生理学』はもともと匿名で「ある一教授」による、として出版された。